

ドライサーの『ジェニー・ゲアハート』

——センチメンタル小説と人生という奴隷制の認識——

中島 好伸

自伝『新聞記者時代』によれば、セントルイスのグローブ・デモクラット紙記者時代、セオドア・ドライサーはセンチメンタルな芝居を食るように見たとある。

極めて甘ったるい感傷やお涙頂戴ものをあの当時は飲み込むことができた。いまでも、たとえば映画なら飲めるが、あれは今の自分には信じられない。でも僕はあの頃、あれを飲み込んだのだ。そういうと奇妙に思われるかもしれないが、僕はその手の極みだった。⁽¹⁾

1893年のことである。のちの1900年に極めて「自然主義的」と呼ばれる『シスター・キャリー』を出版するドライサーだけに、「いまの自分には信じられない」と言うのも頷ける。しかしドライサーは、芝居に限らず、センチメンタルな作品に親しんでいたことは事実のようで、ヴァレリー・ロスも指摘するように、その事実を伝えるために多くの批評家がこの『新聞記者時代』の一節を引いている⁽²⁾。そのドライサーが、『シスター・キャリー』の不評で神経衰弱に陥る直前の1901年の1月には、次の小説『ジェニー・ゲアハート』（はじめは『道徳の脱線者』として構想されていた）を書き始めていた。10年後、世に出て親友の批評家H.L.メンケンに絶賛され、さらに売れ行きも好評だったこの小説は、ドライサー批評史の中では、センチメンタルな小説と読まれることが多く、センチメンタル＝できの悪い小説という文学史の基準により、高い評価は与えられてこなかった。

それでもドライサー批評家は、いろいろな角度からこの作品を引き上げようとしてきた。なかでも、1911年に出版された初版は編集者のリップリー・ヒッチコックにより一万六千語以上も削除されたゆえセンチメンタルなものになった、と解するものが多く、1993年に出版された完全版（ペンシルヴェニア版）によりいかに初版の削除によって自然主義的側面がゆがめられたかが明らかになった、と解する向きが多い。1995年にジェイムズ・ウエスト三世編集になる評論集『ドライサーの「ジェニー・ゲアハート」－復元テキストに関する新論集』はこの事情をよく語っている。

しかし、復元版であれ初版であれ、ジェニーが上院議員の私生児を産み、さらに資産家の息子の愛人となって囲われるという物語の骨格に大きな違いはない。肉づけのされた方がよりリアリズムを強調しているのは事実であろうが、骨格そのものが、ドライサー自身

が批判した19世紀センチメンタル小説の骨格と類似していることもまた事実である。

黒人作家リチャード・ライトは、自伝『ブラック・ボーイ』の中で次のように言う。

僕は『ジェニー・ゲアハート』と『シスター・キャリー』を読んだ。これら二つの小説は僕の中に母親の苦しみを生き生きと甦らせた。僕は圧倒された。二つの小説から僕が引き出したものを誰かに語ることは不可能だったであろう。と言うのも、それは人生そのものの意味以外の何ものでもなかったからだ。僕のそれまでの生活が僕を現代小説のリアリズム、自然主義へと導いてきた。僕はそれらを十分読むことはできなかったが。⁽³⁾

ライトが読んだ『ジェニー・ゲアハート』のテキストが何版であったかは定かでない。しかし、『ブラック・ボーイ』が1945年の出版であることを考えただけでも、それが完全版であったはずがなく、それでもセンチメンタルなものを嗅ぎ取るのではなく、『シスター・キャリー』と同じように『ジェニー・ゲアハート』のなかにも「人生そのもの」を読み込んでいることは注目に値する。さらに本稿にとって重要なのは、これらのテキストを読んで母親の苦悩を思い出していることである。1908年生まれのライトであるから、時は人種隔離政策の時代だった。

一方、ドライサーが批判した19世紀センチメンタル小説は、たとえば『アンクル・トムの小屋』がそうであるように、黒人奴隷制を物語のなかに組み込むことが多かった。そしてその物語の骨格は、たとえばインディアン捕囚物語でもそうであるように、「因われ」なのである。ここにライトが「人生そのもの」だと言った『ジェニー・ゲアハート』とセンチメンタル小説の関係が見えて来る。ドライサーは19世紀センチメンタル小説を批判するが、この批判は文学史の流れに符合し、ナサニエル・ホーソンが「書きなぐる女の忌々しい集団 (damned mob of scribbling women)」⁽⁴⁾と呼んだセンチメンタル女性作家たちの文学史上の評価は概して低かった。センチメンタル=できの悪い小説の基準により、『ジェニー・ゲアハート』も高い評価を与えられなかった。が、ドライサーはセンチメンタル小説のなかに「人生そのもの」の枠組をしっかりと発見したのではなかったか。重要なのは奴隷制だった。本稿では、19世紀のセンチメンタル小説、中でも『ジェニー・ゲアハート』と似た物語枠を持つリディア・マリア・チャイルドの短編小説「混血黒人たち」を引きながら、その後ドライサーが人生を考える上で鍵となる基礎概念を抽出してみたい。

2

リディア・マリア・チャイルドの短編小説「混血黒人たち」は、奴隷制反対文学年報『自由の鐘』第1号に投稿するため執筆され、1842年に出版された。スーザン・コッペルマンの編集によるアンソロジーの本短編の巻頭に置かれた解説にもあるように、「この物語は

広い読者層と大きな影響力を持った」らしいが、1847年のチャイルドの短編集『事実と小説』以降リプリントされなかった⁽⁵⁾。出版と同時にベストセラーとなりながら、文学史に重要な位置を与えられなかった19世紀女性センチメンタル小説の典型的な例と言えるだろう⁽⁶⁾。ドライサーがこの短編を読んでいるかは明らかではなく、今後の研究を待つしかないが、少なくとも、この短編が19世紀センチメンタル小説の典型である「誘惑され妊娠し捨てられる」という形を持っていること、そしてドライサーがこのような19世紀センチメンタル小説を批判していながらも、いたる所にプロットの類似性を見ることができることから、チャイルドの「混血黒人たち」と『ジェニー・ゲルハート』を比較することは意味があると思われる。

それでは簡単にチャイルドの「混血黒人たち」の物語を追いながら『ジェニー・ゲアハート』と比較検討してみよう。「混血黒人たち」のロザリーは8分の1黒人の血が流れる「クオドルーン」と呼ばれる肌の白い混血黒人である。彼女の魅力に引かれた白人エドワードは「ジョージア州オーガスタにさほど遠くない」サンドヒルという保養地で彼女とともに生活する。しかし、彼女は黒人であるため彼とは結婚できない。二人は10年そこで暮らしたがザリファという名の娘ももうける。ところがエドワードは政界に関心を持つようになり、大物政治家の娘の歓心を買って結婚にいたる。もちろんロザリーはザリファとともに残される。娘ザリファは母ロザリーの深い悲しみを気遣うが、エドワード結婚の一年後、ロザリーは死の床につく。「エドワードは葬式にやってきて、墓の側で長く長く泣くのだった。」エドワードは残されたザリファを可愛がり、ハーブを習わせるために「ハンサムで人好きのする青年」をつけたりするが、ザリファが15歳のとき、エドワードは落馬して死ぬ。悲しみ沈むザリファだが、ハーブの先生とは愛が芽生えていた。ところが、そんなザリファに災難が降りかかる。ロザリー自身は知らなかったが、彼女は奴隷の娘だった。彼女の主人は死ぬまでその奴隷を側に置いたが、うかつにも解放証書を記録しておくのを怠っていた。このミスがのちに孫のザリファに振りかかり、彼女が奴隷の競り台に立つことになる。ザリファを買った主人は彼女をひどく扱ったわけではないが、彼女は当然満たされず、逃亡を計画する。しかしその計画は密告され、助けにきたハーブの先生ジョージ・エリオットは射殺され、後にザリファも失意のうちに死ぬ⁽⁷⁾。「混血黒人たち」はこのような物語である。

さて、『ジェニー・ゲアハート』の主人公ジェニー・ゲアハートも、車両製造業者の息子レスター・ケインに愛されながらも、彼の人生観ゆえ結婚せず、シカゴに借りたアパートに囲われる。しかもレスターの父が、ジェニーを捨てて会社の相続を取るかジェニーを取って遺産を諦めるかの選択を出すと、苦しんだすえ会社を取り、そのうえ社交界の娘レットィ・ペイスと結婚して、ジェニーと、ジェニーの死んだ上院議員ブランダーとの間にできた私生児ヴェスターを捨てる。こう見れば骨格の部分で「混血黒人たち」と『ジェニー・ゲアハート』の物語は類似していると言える。

『ジェニー・ゲアハート』の冒頭部分、ジェニーが上院議員ブランダーに愛される部分と「混血黒人たち」の娘ザリファが奴隷として売買される部分は異なるものの、重なる類似部分には、物語の骨格以外にも類似する要素はいたるところに見られる。たとえば、ロザリーが「宵の星のように美しく」「優れて詩的な性格」(3)と性格付けされているのに対して、ジェニーもまたブランダーやレスターを引きつけた美しさが貧しさとともに強調され、また「君には詩が書ける。詩を生きているんだ。詩なんだよ君は」⁽⁸⁾とブランダーに言わせたように、ジェニーもまた「詩」と結び付けられている。そしてジェニーの「詩的な心」(3)は母親譲りとあるが、母と娘の関係に注目すれば、ザリファもまた「母親の詩的で情動的な気質を引き継いだ」とある。さらに、レスターがレッティ・ペイスと結婚したあと、ジェニーが娘ヴェスタと住むのを選んだ場所は、シカゴの北にある「ケノシャのこちら側」(360)とジェニーが表現しているサンドウッド (Sandwood) であるが、ロザリーがエドワードと住み、また彼に捨てられたあと彼女が住んでいたのはサンドヒル (Sand-Hill) で、奇しくも共通した「サンド」の音を持つ名前が与えられている。ここにサンドウッドとサンドヒルの描写を並べてみよう。

「ケノシャのこちら側」とジェニーが表現していたサンドウッドという小さな町は、シカゴから、そこに止まるどんなローカル列車に乗っても1時間50分というちょっとした距離にあった。そこは約300世帯の人口があり、湖岸に位置する気持ちよい地域に散らばる小さな家に住んでいた。(361)

ジョージア州オーガスタからさほど遠くない所に、サンドヒルと呼ばれる気持ちのよい場所がある。近隣都市に住む裕福な住民の夏別荘としてもっばら使われていた。この地を飾る美しい家々のなかで、公道から遠く奥まった所に一軒、木々の中にほとんど隠れた家がある。それは田園美の完全な典型であった。(2)

都市からの位置描写、「気持ちのよい (pleasant)」場所や「(家) cottage」という表現、牧歌的な雰囲気など、名前ばかりでなく、ドライサーがサンドヒルをそのままサンドウッドに書き換えたと思われても無理のないくらい類似点が多い。そして、ジェニーとロザリーを捨てた二人の男はともに酒を煽って死んでいく。ジェニーの重要さに気づいていくレスターは「ますます酒に浸っていった。酔っばらいが酒に浸るという風にはではなく、社交的に機会さえあれば挨拶がわりに友達と飲むという浪費家として飲んだ」(405)。その結果、彼の身体はぶくぶくと太りだし、身体を壊して死に至る。一方エドワードも「酒をたらふく飲むことで惨めな気持ちのはけ口を求めた。ザリファーが15歳になるとすぐに父は道路脇に死んで発見された。ザリファーに会いに行く途中馬から落ちたのである」(9)。おそらく酒を飲んでの結末だろう。ジェニーがレスターの死を耐えるのに対してエドワー

ドがロザリーの死を悲しむという死の順序が逆であるが、こんな所にも共通点を見出すことができるのである。

このように、出版に6、70年の開きがあるこの二つの作品であるが、物語の骨格から描写の細部に至るまで類似点を指摘することができるのであるから、ドライサーがチャイルドの「混血黒人たち」を読んで、単なるパロディではなく、この作品の中にライトが感じ取った「人生そのもの」を見出していた可能性は優れて高いと思われる。それではこの「人生そのもの」とは何であろうか。

3

ドライサーにとって「人生そのもの」とは何だったのかの結論に入る前に、『ジェニー・ゲアハート』に透けて見える19世紀センチメンタル小説との関係にもう一度立ち返ってみよう。19世紀センチメンタル小説がインディアンに囚われた女性の物語や奴隷制を物語のモチーフに使っていることはすでに触れたが、『ジェニー・ゲアハート』の物語そのものにも、もちろん直接黒人奴隷制に触れているわけではないが、奴隷制を引き合いに出しても領けるいくつかの要素がある。ひとつは舞台をオハイオ州にしていることである。レスター・ケインの家族はシンシナティの鉄道車両工場経営者で裕福な階級である。どうしてシンシナティなのだろうか。ジェニーのホームタウンであるコロンバスについては、1915年の夏にドライサーがフランクリン・ブースとインディアナへの2000マイルの自動車旅行をしたとき、ペンシルヴェニア州のエリーの町を見て、着想したという。この点についてフィリップ・ガーバーは次のように述べている。

ドライサーはエリーを訪れたことはなかったしコロンバスに足を踏み入れたこともなかった。その事実がジェニーの物語りの舞台としてコロンバスを選ぶ妨げにはならなかった。ドライサーは、ジェニーの生誕地にもうひとつの都市（おそらく自分の生誕地インディアナ州テレポート）を実際にはモデルにしているとはっきり認めている。がしかし、つまるところ意味は同じである。すなわち、アメリカの典型的な中都市であればどこでも、ジェニー・ゲアハートの最初の章にドライサーが必要とした、アメリカ生活の代表的な一断面を提供してくれ得るだろうということである。⁽⁹⁾

行った経験のある街を「アメリカの典型的な中都市」として選ぶのなら首肯できるが、行った経験のない街を選ぶにはもっと積極的な意味が必要なはずである。『ジェニー・ゲアハート』執筆までにドライサーがシンシナティを訪れていたかどうかの調査はできていないが、少なくともシンシナティに意味を持たせることによって、同じオハイオ州にあるコロンバスが位置づく。その鍵は、やはり19世紀センチメンタル小説の代表とも言われる

ハリエット・ピーチャー・ストウの『アンクル・トムの小屋』に求められる。

ストウは1832年よりシンシナティに住み、『アンクル・トムの小屋』を執筆するため、シンシナティから東約50マイルのオハイオ川上の町リップリーにあるランキン・ハウスにたびたび滞在したという。この家は奴隷解放論者ジョン・ランキンが1828年にこの地に建てたもので、目前を流れるオハイオ川には対岸のケンタッキー州から決死の思いで渡ってくる逃亡奴隷を見ることができた。ランキンは逃げてくる奴隷たちを助け、ここから北へカナダまで伸びる地下鉄道組織に乗せて2000人以上もの奴隷を逃がした。ストウが『アンクル・トムの小屋』で描いたオハイオ川を渡るエライザは、ここがモデルになっていた⁽¹⁰⁾。オハイオ川を渡ったエライザは地下鉄道組織に乗ってオハイオ州を縦断し、クリーヴランドから60マイル余り西のサンダスキーからカナダへと逃亡する。もちろんコロンバスはリップリーからサンダスキーの中間点に位置し、レスターと出会う前、コロンバスからクリーヴランドへと引越すジェニーと方向が重なる。

このような重なりが作品解釈上、単なる類似以上の意味を持たないことは承知している。しかし、チャイルドの「混血黒人たち」との類似性を見てきた私たちにとっては、ドライサーの19世紀センチメンタル小説批判と併せて、このような解釈を許す素地を残しているように思えてならない。さらに想像力をたくましくしてみよう。オハイオ川に面したシンシナティの街は、ドライサーが1882年から約1年、11歳のときに生活したインディアナ州の街エヴァンズヴィルと極めて類似した特徴を持つ。ともにそれぞれの州の南西部に位置しオハイオ川に面している。村山が指摘するように、「ゲアハート家に起きる事件が、そのモデルである問題家庭ドライサー家に起きた事件を、かなり忠実に時間的順序をたどって」て、ジェニーのモデルであるドライサー家の長姉「メームが法律家により孕まされたのは1879年のことであったのに、小説中にジェニーは1881年にヴェスタを出産している」⁽¹¹⁾。ジェニーがシンシナティ出身のレスターに会うのが、ヴェスタが1歳の頃と読めるので、1882年。つまりドライサーがエヴァンズヴィルに居た年とほぼ符合することになる。エヴァンズヴィルをモデルにしながら虚構化するにもかかわらず、実在するシンシナティを描く。ここには、作者ドライサーの思惑がしっかりと秘められていると言えないだろうか。

さらにもうひとつ。リチャード・リンジマンも指摘するように、「ドライサーは、自分自身のドイツ系移民のバックグラウンドを『ジェニー・ゲアハート』ほど十分に描くことは二度となかった」⁽¹²⁾。前作の『シスタ・キャリー』にドイツ系を読者に意識させるような点はあまり見当たらない。しかし、なぜ『ジェニー・ゲアハート』においてここまでドイツ系移民のバックグラウンドを描いたのだろうか。実はケイン一家がアイルランド系であることもさりげなく書き込まれている。つまりゲアハート家のドイツ系とケイン家のアイルランド系ということになる。ドイツ系の移民は1840年代から50年代にかけて大挙してアメリカに押し寄せ、ペンシルヴェニアから西の中西部に多く住み着いた。ドライサーの

父親がドイツの故郷マイエンを離れたのは1844年のことである⁽¹³⁾。さらに重要なことは、的場が指摘するように、「シンシナティは『住民に関して、シンシナティ以上にドイツの性格や感情、ドイツ人の代表が支配している町はない』と言われるほどのドイツ人都市であった」ことである。そして的場によれば、1848年から9年にかけてのドイツ系移民は、本国での3月革命に敗れてアメリカへ渡った政治的移民が比重を増し、彼らはアメリカで奴隷制反対の運動を始めるといふ。的場の解説をここに引いておこう。

亡命者が、ヨーロッパで革命の道を探る方法は革命への支援という点にあっただけでなく、アメリカ社会の変革にもあった。ハインツェンの次の言葉はそれを的確に表現している。「アメリカの奴隷政策に対する反対は、ヨーロッパの反動に対する戦争である。この共和国がヨーロッパの自由のために何かすることが出来るとすれば、それは奴隷制の束縛をその首根っこから離れたときしかない」と述べていた。アメリカの奴隷制の問題が亡命者の注意を引いたのは、奴隷制を支える支配体制がヨーロッパの専制と類似していたという点だけではなく、その体制がアメリカ孤立主義によって、ヨーロッパでのウィーン体制を支えているという点にあった。⁽¹⁴⁾

もちろんドライサーの父ジョン・ポールは、徴兵をのがれてマイエンを後にしたのであって、政治的移民であったわけではない。しかも、作品中、シンシナティに住居を構えていたのはドイツ系のゲアハート家ではなく、アイルランド系のケイン家であったことも確認しておかなければならない。しかし、シンシナティが1830年代のドイツ系移民に併せて、1840年代のジャガイモ飢饉により移民してきたアイルランド系が発展させたこと、さらに先のリップリーというランキン・ハウスの町がアイルランド系移民を開拓者に持ち、1840年代のドイツ系移民の定住によって町が開かれたことを考え合わせれば、『ジェニー・ゲアハート』において、ドイツ系が強調されていることと奴隷制が関係していることを主張しても、荒唐無稽な推論とは言えまい。

ドライサーはセンチメンタル小説を浸るように読んだ。それら19世紀のセンチメンタル小説は、『アングル・トム的小屋』や「混血黒人たち」もそうであるように、奴隷制に物語のモチーフを求めた。ドライサーは、のちにセンチメンタル小説を批判するものの、奴隷の人生の中に人生そのものを見たのではないだろうか。その結果、『ジェニー・ゲアハート』という物語の中に、奴隷制を喚起するような要素が入り込んだのである。

4

ドライサーは19世紀センチメンタル小説の中に奴隷制を発見した。そこに描かれた奴隷たちはドライサーの家族と重なっていた。ドライサーの長姉メームをモデルに描かれたジ

エニーは、母親と一緒にホテルの階段を磨き上げる仕事を始め、さらに上院議員の洗濯物を洗い届ける。ドライサーは奴隷状態と何ら変わらない自分の家族を小説化した。『ジェニー・ゲアハート』における家庭労働」と題する論文の中で、ナンシー・ウォーナー・バリノーは次のように言っている。

1890年の国勢調査により代表される家庭内労働者は、女中、ホテルの部屋係、家政婦、料理人、事務所掃除人も入れてそのほとんどが、若く未婚の住み込み雇われ人だった。移民や移民の娘がその数の半分を占め、4分の1はアフリカ系アメリカ人だった。⁽¹⁵⁾

まさに1890年代のアメリカの状況がドライサーによって見事に写し取られていたことになる。奴隷解放の夢は、ドライサーにとって成功の夢へとつながっていく。しかしそれは簡単なことではなかった。西洋近代小説のルーツとされ、センチメンタル小説の枠組としての「誘惑」を最初に描いたサミュエル・リチャードソンの『パメラ』のように、「人生そのもの」はなかなかハッピー・エンディングにはならない。と言って、白人中産階級の女性が、自分たちを奴隷と重ね合わせていたとは言え、「混血黒人たち」のザリファを読んで他人事のように涙を流しても始まらない。ドライサーの19世紀センチメンタル小説の批判はここにある。しかしながら、ドライサーの出発点も19世紀センチメンタル小説の作者たちと同じように、自分と自分の家族を奴隷と重ね合わせて考えていたことは、『ジェニー・ゲアハート』を読む限り事実である。しかし、19世紀センチメンタル小説の作家たちと違うのは、人間存在そのものが奴隷制的枠組を持っていることを思想的な核に据えて、そのことをリアリズムの手法で描きあげていくことにある。労働者に対する資本主義、精神に対する肉体、さらには人間主体に対する言語、ドライサーの文学は、このような奴隷状態に置かれた人間の解放の探求として発展していくと言える。ライトが見て取った「人生そのもの」とは、このような人間解放のドラマだった。

ドライサーが黒人作家ライトに与えた影響はしばしば指摘されてきた。しかし、黒人作家が、または黒人が、ドライサーに与えた影響はほとんど指摘されていない。短編小説「ニガー・ジェフ」は黒人を扱っている。しかし、ドライサーが黒人奴隷制から何かを学んだという分析はない。本稿で見てきたのは、今まで注目されてこなかった黒人奴隷制と、ドライサーの關係に光を当てることである。その結果見えてきたものは、ドライサーが奴隷制のなかに人生そのものを見いだしたということである。

注

1. Dreiser, Theodore. *Newspaper Days*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1991. 220.

2. Ross, Valerie. "Chill History and Rueful Sentiment in *Jennie Gerhardt*." *Dreiser's Jennie Gerhardt: New Essays on the Restored Text*. Ed. James L.W. West. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1995. 40.
3. Wright, Richard. *Black Boy*. Harper & Row, 1966. 274.
4. ホーソンと19世紀女性作家については次のものを参照した。Nelson, Dana D.. "Women in Public." *The Cambridge Companion to Nineteenth-Century American Women's Writing*. Eds. Dale M. Bauer and Philip Gould. Cambridge University Press, 2001.
5. Child, Lydia Maria. "The Quadroons." *The Other Woman: Stories of Two Women and a Man*. Ed. And with an Introduction by Susan Koppelman. Old Westbury, N.Y., 1984. 「混血黒人たち」は本書に依拠した。以後、引用箇所は本文中引用語の括弧内の数字にて示す。
6. 総頁1400余ページに及ぶコロンビア大学編纂アメリカ文学史のチャイルドの項は2ページに渡っているもののわずか28行に留まる。ホーソンは8ページにも及ぶ。チャイルドが文学史でどう扱われてきたかを示すものである。 *Columbia Literary History of the United States*. Ed. Emory Elliott. Columbia University Press, 1993. しかしながら、女性作家による19世紀センチメンタル小説は、はじめアン・ダグラスが『アメリカ文化の女性化』(1977)において注目し、ジェイン・トンプキンスがこれを批判的に継承することによって、その重要性が指摘されつつある。たとえば、次のものを参照。 Tompkins, Jane P. "Sentimental Power: *Uncle Tom's Cabin* and the Politics of Literary History." *Glyph* 8: 79-102. 1980.
7. 物語の締めくくりは、次のような読者への呼びかけとなっている。「読者よ、あなた方は私が小説を書いたと言って不満を言うだろうか。信じていただきたいが、このような情景は南部において珍しいことではない。世界は、混血黒人の歴史のような題材を悲劇的ロマンスにする余裕がないのだ。」(12) 積極的な奴隷解放論者であったチャイルドの真骨頂であるが、ハリエット・ピーチャー・ストウの『アンクル・トムの小屋』にも同種の呼びかけがあり、奴隷制批判と結びついた19世紀センチメンタル小説の特徴となっている。なお、ドライサーの『シスター・キャリー』や『ジェニー・ゲアハート』にも、もちろん奴隷制批判ではないが、作者が顔を出し人生論を展開する語りが見られる。このような語りも一種の類似点と言えよう。
8. 1911年出版の初版と1993年に出た完全版（ペンシルヴェニア版）とあり、物語の骨格に大きな違いはないが、初版は出版者によって削除されている点、また今後完全版による解釈が主流を占めると考えられるので、本稿では完全版を使用する。 Dreiser, Theodore. *Jennie Gerhardt*. Ed. James L.W. West III. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1993. 47. 以後、本書からの引用は本文中引用後の括弧付き数字にて示す。
9. Gerber, Philip. "*Jennie Gerhardt*: A Spencerian Tragedy". *Dreiser's Jennie Gerhardt: New Essays on the Restored Text*. Ed. James L.W. West III. 77.

10. ランキン・ハウスについては、2000年10月に直接現地に赴き調査した。史実はランキン・ハウスのパンフレット、リップリーの発行するリーフレットによる。なお、ジョン・ランキンについては、次の黒人史にも名前を連ねている。Franklin, John Hope. *From Slavery to Freedom: A History of Negro American*. Alfred A. Knopf, 1980. 193.
11. 村山淳彦『セオドア・ドライサー論』(南雲堂、1987年) 83 なお、『シスター・キャリー』では、エヴァンズヴィルが実名で使われている。Dreiser, Theodore. *Sister Carrie*. W.W. Norton, 1993.
12. Lingeman, Richard. "Biographical Significance of *Jennie Gerhardt*." *Dreiser's Jennie Gerhardt: New Essays on the Restored Text*. Ed. James L.W. West III. 15. 他にドイツ系移民について注目した論文は前掲論文と同じ論集に収録された次の論文を参照。Casciato, Arthur D.. "How German Is Jennie Gerhardt."
13. Swanberg, W.A.. *Dreiser*. Charles Scribner's Son, 1965. 5.
14. 的場昭弘「一八四八年革命の精神と革命家」的場昭弘他編『一八四八年革命の射程』(お茶の水書房、1998) 24
15. Brrineau, Nancy Warner. "'Housework Is Never Done': Domestic Labor in *Jennie Gerhardt*." *Dreiser's Jennie Gerhardt: New Essays on the Restored Text*. Ed. James L.W. West III. 130.

なかじま よしのぶ (アメリカ文学)